

博物館都市巡り

ドレスデンとコヴヱントリ

二羽の不死鳥

高橋 哲雄

博物館の本筋の仕事といえは、収集・保存・展示であろうが、収蔵品の修復・復元の分野も無視できない。むしろ博物館の真の実力はそうした裏方的な面においてもっともよく発揮されるかもしれない。都市、とくに歴史のある都市にとっても、その 収蔵品 文化や伝統 が何ものかによって破壊されたり、奪い去られたりしたときは、そこから立ち直りぶりにその都市の力量や哲学が映し出されるものである。今回はその「何ものか」が戦争という特異な暴力であった場合を考えたい。第二次大戦のもっとも有名な二つの戦災都市 ドレスデンとコヴヱントリ の再建をその素材としよう。

「エルベ河畔のフィレンツェ」

ドレスデンはドイツ東部、もつちチェコ国境に近いエルベ河沿いの古い

都である。「エルベ河畔のフィレンツェ」とか「ドイツのフィレンツェ」とか呼ばれる。

私はこの呼称 公式のガイドブックにもみられる にずっと抵抗を感じていた。たしかにここは都市美と美術館のコレクションで知られている。十八世紀前半のアウグスト二世（強王）と三世の時代に壮麗な建造物群が一挙に姿を現わした。対岸の新市街、たとえば日本庭園やホテル・ベルビューの屋上（ぶつうは上がれない）から望む街のスカイラインは、同じ時代の同じバロック様式の、つまりは巨大で劇的な建造物群がひしめき合って息を呑むようなアンサンブルをかたちづくる。それはミケランジェロの丘からみた有名なフィレンツェの景観さえも平面的で大味に感じさせるほどである。しかし、それにしても「フィレンツェ」とは、いささか大仰ではないか。

私はこの疑問を高名なトランペッター奏者で日本にも数多く来演し、この街の中心にある聖母教会再建委員会の代表でもあるギョットラーさんにぶつけてみた。「なぜバロック都市ドレスデンがルネッサンスの世界都市である、あのフィレンツェになぞらえるのか」と。復元工事中のこの名教会の高い足場でつよい風に気をとられながらの話である。

氏はいろいろなことをいわれた。この周辺はアルノー河沿いと同じくワイン地帯であることなど。そのなかで興味を惹かれたのはドレスデンは西からの影響よりも南からの影響の方がつよく、プラハ、ウィーン、そしてヴェネツィアとの文化交流が盛んだったということだった。アウグスト強王がポーランド王を兼ねるためカトリックに改宗して宮廷教会を建てたときも、職人はイタリアから呼び、いまのオペラ座広場の川べりに「イタリア村」ができた。アウグスト王はエルベ河にヴェネツィアやフィレンツェのように建物の乗った橋をかけようとしたとも。

ドイツといえばまず東西軸でみるくせのついでに私には、それでいけば「深ヨーロッパ」ともいうべき奥まった僻地にあるドレスデンが、南北軸上ではむしろ中心的な位置を占めているという指摘は新鮮に響いた。ひとつには、私たちの世代には、若き日のマクス・ウェーバーやレーニンの影響から、エルベ河をもって旧ドイツ帝国だけでなくヨーロッパ全体を東と西に分かつ境界線とみる抜きがたい認識が焼き付いているのだ。エルベの東といえばブルジョア文明の光に浴しないおくれた地の印象があった。しかし、『ドイツとロシア』の著者である畏友肥前栄一によれば、もっと本質的な境界線はもっと東の方、聖ペテルブルク

とトリエステを結ぶ線（ハイナル線）にあるというのが近年の定説であるらしく、それからいってもドレスデンは辺境都市ではないのだ。

南北軸の存在はツヴィンガー宮の膨大なコレクションをひと回りするだけでも実感できる。こここの「アルテ・マイスター」絵画室はラファエロの名品「システイナの聖母」をはじめとしてイタリア絵画の比率が質量ともにもっとも高く、なかでも晩年をここで送った風景画家カナレット（一六九四—一七六八）は二十二枚もの大作をここで制作した。細密をきわめた画風で、火災や戦争で街並が変わるたびに、彼の絵をみて復元が行われたという話がある。

「黙示録の夜」

しかし、私はそういう話を聞くためにこの街にきて、ギョットラーさんに会ったわけではない。

ドレスデンは第二次大戦でドイツ降伏のわずか二か月半前の一九四五年二月十三日の夜、イギリス空軍四百機の爆撃によって壊滅的打撃を受けた。三四〇〇トンの爆弾、六五万個の焼夷弾が投じられて地域の七五%が破壊され、三万五千人から一三万五千人の間と推定される人命が失われた。なぜこのように懸け離れた「推定」ともいえない数字が出てくるのか。当時ドレスデンはその測り知れぬ文化的財宝価値や英仏との文化的交流の歴史、さらには軍需産業も軍事施設も存在しないことから、空襲の心配のない安全な都市だという風評が立っていて、周辺の戦災都市やソ連軍の進攻路に当たる町や村から脱出した膨大な数の避難民で

こつた返していたからである。

ではなぜこの街が爆撃目標に選ばれたのか。一つには対空砲火の恐怖がなかったからといわれる。第二次大戦中のイギリス空軍の損傷率は高く、動員された一三万五千人のパイロット中六万人が戦死、生還者も多くが神経症を病んだ。当夜攻撃を行ったランカスター爆撃機はとくに危険度の高い機種で、米空軍のB 17（「空の要塞」）やB 29（「超空の要塞」）のような重装備に身を固めていず、空中戦に弱かった。また米のP 51ムスタングのような足の長い援護機にも恵まれなかった。パラシュート脱出の成功率はわずか五分の一。とあってみれば安全な目標への夜間の無差別爆撃とならざるをえない。

ドレスデン空爆はまたドイツ空軍の「ベデカー空爆」への報復だったといわれる。英空軍のブレイメン歴史地区誤爆に端を發して、ドイツはバースを皮切りに、有名な観光ガイドブック「ベデカー」に出てくるイギリスの歴史的都市を次々に爆撃した。それへの仕返しの上げとしてドレスデンを選んだというのである。だとすれば、街の美しさが仇となったわけだ。

再建への道のり

戦後もドレスデンはついていなかった。ソ連圏に残され四九年に東ドイツに属したこの街は、貧しさのため復興は全体としておくれ、歴史的な文化財の再建にも優先順位がつけられた。国立美術館でもあるツヴィンガー宮は「奇蹟」といわれるほどみごとに復元されたが、旧市街の中

心があり、市民の力によって（市議会の監理の下に）建てられた聖母教会（一七二六 三八）は巨大なボタ山のような廃墟のまま放置された。

市民の再建への意志はつよく、すでに一九四七年には黒こげの瓦礫の山から再利用できる石材の選別作業がはじめられていた。しかし、東独政府は主としては費用がないため、またひとつには「資本主義の文化破壊の暴挙」の宣伝のため復元を認めようとせず、その四十年の支配の間にいくどか廃墟を除去してしまおうとさえした。これに反撥して市民は一九八二年以来、空襲記念日には廃墟でろうそく平和集会を開催してきた。

一九八九年の壁の崩壊以後、事態は急速に進む。九〇年二月には最初の再建グループ「ドレスデンからの呼びかけ」が結成される。再建のありかたについては意見の差があった。破壊された歴史的モニュメントは「開いた傷」のまま保存するのが正しいのではないか。ドイツ史の暗黒面の証拠としてそのまま残す方が力づよい平和への意志の表現になるのではないかと。しかし、そうした意見は少数にとどまり、新しい教会は「ユニークな美しさをもつ建築物モニュメント、バロック時代のドレスデンの歴史的モニュメントであるにとどまらず、破壊から再建する勇氣と、われらの時代にあつて（過去を）癒し、新しく出発し、未来をかたちづくる」という道徳的意志のモニュメント」として必要だとされた。それはまた「平和と再統合されたヨーロッパのなかの民族の和解の記念碑」という位置づけもされた。

再建は完全な復元のかたちをとるようになった。それも、できるだけ

もとの石をもとの場所へ、という徹底したものである。ギョットラーさんは電気系統だけは新しいがと笑った。募金やグッズの販売も順調で、当初はドレスデン建都八百年に当たる二〇〇六年の完成予定が二〇〇五年度に前倒しできるとのことであった。地下聖堂ではすでに週二回の礼拝と週末の募金コンサートが行われている。



復元途上の聖母教会（ドレスデン）二〇〇三年九月

凍結と復元

ドレスデンの聖母教会のばあいは廃墟のまま凍結の状態が半世紀近くつづいて、それから完全復元へと方針が逆転する。その間市民の多く

は教会をもとの姿に戻すことを望んでいて、それが実現した。

廃墟の凍結は悲惨な記憶の保存を重くみようという考えに立つものである。ナチスの強制収容所跡や、やはりナチスの集団殺戮の行われたベルギーのオラドゥール・シュル・グレーヌ村などがその例だが、都市中心部では土地の経済性・利便性から実現はむづかしい。チャーチルはベルギーのイーペルについてそれを主張し、安藤忠雄もニューヨークのグラウンド・ゼロについてそれを提言したときくが、いずれも実現しなかった。多くのばあいは広島島の原爆ドームやベルリンのゲデックニス教会のように残存した一部のみを象徴的に保存するかたちをとる。

完全復元型再建は、なぜかドイツで目立つ。ニュールンベルクの再建では、主な建造物については十分のインテリベルの誤差まで追求するという徹底した復元ぶりだったというが、記録もよく残されていたのだらう。ポーランドも完全復元型だが、民族の伝統と破壊したナチスへの



エルベ対岸からのドレスデン旧市街、1930年代（左の円塔が聖母教会）

抵抗の意味が込められていたからといわれる。

復元が選ばれるのは、一般的にいえば対象が歴史的・文化的価値が高いもの、シンボル性があり人びとの愛着のつよいもの、といったばあいであろう。聖母教会のばあい、これらはすべて満たされていた。そのほか、周囲との景観的調和がドレスデンのばあい重要な要素であった。対岸からみる旧市街のパノラマから聖母教会を除くか、代わって別のあたらしい建物を入れるかしたばあい、この街の景観美は決定的にそこなわれないだろうか。

コヴェントリのばあい

私がギョットラーさんらの話で感銘を受けたのは、再建に当たっての「旧敵」の国ぐにとの連帯であった。「呼びかけ」は次のようにいう。「われわれはこの戦争をはじめたのがドイツであることを苦痛をもって認め、そのうえで戦勝国と（それらの国ぐにの）善意の人びとに呼びかける。

この『平和の家』を可能にしてほしいと」。こうしてイギリスのドレスデン・トラスト、アメリカの「ドレスデン友の会」、フランスの「パリ聖母教会連合」などの支援組織の活躍が「平和への祈り」をお題目にさせない力となった。ドレスデン・トラストが聖母教会のドーム上の十字架と飾り玉のレプリカを作り寄贈したのは象徴的な意味をもつ。イギリスでもっとも著名な戦災都市コヴェントリの大聖堂の「釘の十字架」のレプリカはドレスデンの聖十字架教会の堂内にかかっている。ボランディアの交流も両市の間にあった。

そのコヴェントリの再建はドレスデンとは対照的な道を歩むことになつた。この街はロンドンから北西へ一六〇キロ、ミッドランド西部の

工業地帯の中心で、当時は「自動車王」モリス（ナフィールド卿）の巨大な自動車、戦車、航空機工場の街だった。にもかかわらず、当時の人口は十八万人と、ロンドンやバーミンガムよりずっと小さく、ロンドン空爆の効果が見えぬのにあせったヒットラーの命じた「一つの都市の壊滅」の実現には

びつたりの規模であった。ここをドイツ空軍が叩くのは当然予想されることだった。

そして予想どおり空爆は行われた。一九四〇年一月一四日夜、ドレスデン空爆の四年三か月前、四百機のドイツ爆撃機が投下した五



旧コヴェントリ大聖堂の廃墟、1940年11月大空襲の直後、右は塔

〇〇トンの爆弾と三万個の爆夷弾がコヴェントリを「死の街」とした。五六八人以上が亡くなり、イギリス最大の合同葬が行われる惨事となった。翌日も火は燃えつづけ、瓦礫の中から死体が飛び出していた。

翌朝情報省から派遣されて駆け付けた人気画家ジョン・パイパーは、熱でかげろつのようにゆれている露をとおしてまだ燃えている大聖堂の後陣を描き上げた。この絵はその年の暮ナショナル・ギャラリーで開かれた戦争画展で展示され、「イギリスのゲルニカ」と評判を呼んだ。

しかし、ここにはドレスデンの悲劇性はない。死者の数を比べることはしないにしても、安全と信じて流入した避難民で溢れる「無防備都市」への攻撃と大軍需工場を抱えた戦略的拠点への攻撃のどちらが非人道的であるかはおのずと明らかだろう。そのうえ、イギリス情報部はドイツ軍の暗号を解読していて、コヴェントリ空襲は事前に予知されていた。しかし、暗号の解読が露見するのをおそれたチャーチルは情報を抑え、そのため市民の疎開がおくれたという説がある。この街の児童疎開率は全国最低であった。コヴェントリの死者の相当な部分は「チャーチルの死者」であつたかもしれない。

大聖堂の重み

それだけのちがいがあつたのにコヴェントリがしばしばドレスデンと並ぶ被災都市の代表として祭壇に祀られるのはどうしてだろう。

もう三半世紀も以前になるが、留学中のシェフィールド大学の経済史の部屋で若い研究者たちとのティータイムにそれを話題にしたことが

あつた。彼らの答えは異口同音に「カシードラル（大聖堂）がやられたからだ」というのであり、いかにそれが都市の歴史と尊厳を傷つける行為であつたかが語られ、まだ見ていないのならぜひ旧大聖堂の廃墟と隣接して建てられたベイズル・スペンスの新しい大聖堂を見るべきだと勧められた。「ラジオ・コヴェントリをちゃんと見ておけよ」と、私には意味不明のことを誰かがいい、皆がどつと笑つた。

その週末に私は友人の車に同乗してコヴェントリに向つた。この街は工業都市であるとともにサクソンの時代以来の古い街でもあつた。領主レオフリック伯とその妻ゴデイバが修道院を建立したのが一〇四三年。ゴデイバは夫の苛酷な課税をいさめ、伯が、白昼裸体で街中を騎乗すれば改めるといつたのを実行したことで知られる勇氣ある女性である。そのときひそかにのぞき見をして目がつぶれたのがあの「出歯亀トム」だつた。この修道院のロマネスクの教会（西正面はいまも遺構が残る）はヘンリ八世の修道院解散で解体されるが、それに先立って一四三三年に後期ゴシック様式の教区教会が建てられていて、それが一九一八年に主教座教会になつた。一九四〇年一月一四日夜ドイツ空軍の爆撃で破壊されたのはこの教会である。

庭園のような廃墟

街の中心、心もち高くなつたところにそれはあつた。旧大聖堂の廃墟は東西に長く、その西側に塔が、東端に後陣が、骸骨状ではあるが残っているほか、外壁はかなり保存されていて、十二月というのに囲い込ま

れた心地よい日だまりをつくっていた。けれども後陣に進むと、そこには焼け落ちた壁からの落石を積み上げた祭壇のうえに、これまた焼けこげた梁材を組み合わせて爆撃後間もなくつくられた十字架が、音が止まったような肅然たる空間を生み出す。

私は祭壇のまえに立ってうしろの壁面に記されている FATHER FORGIVE (父よ赦したまえ) という文字を読みながらふしぎな気分が襲われざるをえなかった。廃墟をそのまま凍結することで悲惨な記憶を守り、平和への祈りへと高めようということのだが、ここにあるのはそうしたきびしさとともに、ドレスデンの汚れた瓦礫の山とはおおよそ別種の、「風景」あるいは「絵」となった美しさである。考えてみるとイギリス人ほど廃墟の演出に長じた国民はいない。あの英国式庭園というのがそれで、あちこちに人工的な廃墟を巧みに配置することで、「自然の風景」のアクセントとしている。

彼らは戦争による廃墟さえも 庭園化 しようとした。ナショナル・ギャラリーの若い館長で、当時イギリス芸術行政を実質的に切り回していたケネス・クラークは、先にみた画家を動員して被災地の状態を彼らの絵筆を通して記録するという官製運動の仕掛人であったが、「爆撃の災害はそれ自身が風景美だ」と公言して、詩人 T・S・エリオットや経済学者の J・M・ケインズらと相語らい、被爆教会を戦争の記念碑としてそれらの「ふしぎな美しさ」や「高貴な魅力」をそこなわぬよう廃墟のまま残すべきだとタイムズに寄稿したりもした(一九四四・八・一五)。

。同じ時期の日本でこんなことをいえば、「非国民」だといわれ、ぶんな

ぐられかねなかっただろうが。

伝統派にはあまりにモダン

旧大聖堂の遺構とほぼ直角に北へ延びる長大な、ちよつとみたところでは劇場が城塞のような建物が、サー・ベイズル・スペンスの設計したあたらしい大聖堂(一九五四 六二)である。私をはじめ訪ねたのは一九六八年のことだから、その六年まえに出来たばかりの現代建築ということになる。

私はすでにスペンスの名も、彼の主な作品も知っていた。エディンバラ大学図書館やサセックス大学で、いずれもコヴェントリ大聖堂以後の作品であり、わるくはないなと思ったものの、それほど感興もおぼえなかった。しかし、この大聖堂はまるでちがった。

廃墟と新大聖堂をつなぐポーチが、まずみごとなアイデアで、巨大なガラスのスクリーン越しに外から内が、内から外が見通せるようになっている。ガラスには天使たち、聖人たちの透かしが入っている軽やかさが異様な迫力に満ちた新大聖堂へのアプローチとして巧みである。

大聖堂の本体は北を奥(内陣)とする長方形で、その長辺(東と西)の壁はジグザグ形状をとり、南西、南東壁に床から天井までの細長いステンドグラスが合わせて十面切り込まれている。はるかに奥の正面には画家ジョン・サザランドの世界一の大きさという巨大なイエス像のタペストリーがかかっている、空間の規模を感じさせる。柱は細く、後期ゴシックの扇状ヴォールトに似た「ハエの眼」と呼ばれる天井に吸い込ま

れるように上昇、すつきりとした空間構成を助けている。床は白と黒のマーブル。全体の印象は広やかさ、軽やかさ、そして光の演出のみことさである。

現代建築になじみがあったとはいえない私が抵抗なく、というより半端でない感動をおぼえた位だからスペインのデザインは突出して前衛的なものではなかった。実際、帰国して消息通の建築家たちに訊ねてもだれも名を知らなかった（日本の建築界は前衛的な人の情報には通じている）。ミシユランのグリーン・ガイドには「伝統派にはモダンでありすぎ、モダニストには伝統的でありすぎ、戦後の建築で一般人の支持を得た少数の一つ」とあるが、実際には彼のデザインにはそれが完成するまで批判



左が旧大聖堂の廃墟、中央から右が新大聖堂（1954～62）、2004年4月

と攻撃の風が吹き荒れた。その多くは誤解にもとづくもので、彼はどこへ行っても「ああ、あのコンクリートのお化けの犯人なのですわ」と言われてくさつたと記している。外壁はすべて旧大聖堂と同じ地元の砂岩を使い、内壁も設計段階では同じ素材を使うことにしていたにもかかわらずである。「ラジオ・コヴェントリ」を見てこいといわれたのは、屋根の上のプロンズの大天使ミカエル像を頂いた風見の塔（写真右上）がアンテナにみえるモダンさをからかったのである。

イギリス地域社会の現代建築に対する抵抗感は根深いものがあつたようで、コヴェントリの市議会は一貫してスペインのデザインを非難し、計画の実現を妨害しつづけ、それが選挙の票とも結びついた。労働党の圧倒的につよい工業都市らしく、労働者住宅用の煉瓦確保を優先したいとが、裁判所、警察、プールが先だとあらゆる口実を使って遅延策が図られた。大聖堂には一枚の煉瓦も使われる予定がなかったというのに。見兼ねた土木相から認可状とともに市長宛の異例の書簡（一九五四・四・二八）が送られた。「大聖堂はコヴェントリだけの建物ではありません。貴方の街を破壊した爆弾の響きは世界中にとどろいたのです。この教会が爆撃のあと再び姿をみせてイギリスの伝統が生きていることを証し立てるのを、国の内外でどれだけ多くの人びとが待ちかねていることが、今日もわれわれの思想を墮落させ腐敗させている、はるかに悪しき破壊が存在します。今日ほど信仰の行為が必要とされているときはないのです」と。

過去への敬意

一九六二年五月三〇日、あたらしい大聖堂の献堂式がとりおこなわれ、この日のために作曲家ベンジャミン・ブリテンに委嘱されていた「戦争レクイエム」が演奏された。ブリテンはこの曲が交戦国間の真の和解のしるしになるようにと、三人の独唱者にヴィシネフスカヤ（ソ連）、ピアーズ（英）、フィッシャー・ディースカウ（独）の起用を想定して作曲した。実際にはヴィシネフスカヤの夫であるロストロポーヴィッチの急病のため、彼女の代役にオーストリアのアルト、ヘルタ・テッパが起用される。私はこの八か月後にロンドンで録音された本来予定されていたメンバーによるレコードを愛聴しているが、この曲もまたコヴェントリ大聖堂と同じく現代作品でありながら伝統を踏まえ、折衷のよさが生かされていることをおもしろく思った。いかにもイギリス的に、おだやかに革新的なのだが、それでも一般にはなかなか受容されないのである。

古い作品に対して新しい作品、「すぐれた過去」に対して「よりすぐれた現在」を提示することはむづかしく、論議的になりやすい。格別に「すぐれた過去」の存在しなかった広島でも、原爆ドームは受け入れられたが、イサム・ノグチのオブジェには違和感を抱く人が少なくなかった。人びとの記憶や愛着が浸みついている過去を超えることは容易ではないので、新改築するばあいでも過去を極力残すか取り入れる、つまり過去に敬意を表する傾向がよくなってきた。

ニューヨークの世界貿易センタービルの跡地利用のコンペで選ばれ

たダニエル・リベスキンドの案もこのビルのえぐられた大きな空地を中心に置き、瞑想空間ないしメモリアル・サイトとする。そこにV字型の広場を設け、まわりに超高層ビルを林立させながら、毎年九月一日の午前八時四六分から一〇時二八分まで、つまり最初の航空機が激突してから二番目のタワーが崩壊するまでの間、広場に影ができないよう計算されている。また崩壊したツイン・タワーの高さ（四一メートル）をしるぐ五四一メートルの尖塔を全体のランドマークとするが、この一七七六フィートという数字はまたアメリカ独立の年を象徴している。V字広場は「アメリカは忘れられない」を、尖塔は「アメリカは負けない」を主張するでもあろうか。

伝統の厚み

歴史がないといわれるアメリカでも、このように過去への視線がみえはじめた。それは、あるいはリベスキンドがユダヤ系ポーランド移民の子で、作品でも強制収容所の改装やユダヤ博物館、戦争博物館といった大戦の影の部分へのつよいこだわりを示す人だったからかもしれない。

それに対してイギリスは歴史的建造物の復元・修復・改築については、よかれあしかれ分厚い実績のある国だった。十八世紀半頃から「ストロベリー・ゴシック」と呼ばれる中世復活の動きがみえはじめ、ヴィクトリア朝（一八三七—一九〇一）になるとそれが頂点に達し、ジョージ・ギルバート・スコット、A・N・ピュージンをはじめとする有力な建築家や学者の多くがそれぞれによしとする様式のゴシックの建造物をきそ

って建立し、あるいはそれに改築した。あの国会議事堂もヴィクトリア朝のあたらしいゴシックなのである。「修復」と称するものの多くが恣意的な、あるいは「創造的」な改築、もしくは「破壊」であり、それらをめぐって議論が沸騰した。そうした騒ぎをつうじて一方では、広い意味でのゴシックが国民的建築様式となるとも、他方では保存・修復のありかたへの国民的関心も高まったのである。ゴシック・リバイバルの旗頭であるラスキンは保存運動のパイオニアでもあった。

ゴシック人気はコヴェントリ大聖堂の再建計画にも影響があった。はじめに設計が委嘱されたのはゴシック・スタイルの大家でリヴァプールのアングリカンの大聖堂を設計したサー・ジャイルズ・ギルバート・スコットであった。しかし、彼のデザインは王立美術協会に受け入れられず、さらに教会側とも折り合いがつかなかった。建築界、宗教界のあたらしい流れとぶつかったのである。

現代では、大聖堂が建立されることはめつたにない。イギリス国教会には四三の大聖堂があるが、うち二〇世紀のものはリヴァプール（一九〇四、七八）とギルドフォード（一九三六、六四）の二つしかない。大聖堂建立を手がけるといふのはたいへんな事件であり、そのデザインは国民的な話題となる。一九〇二年のリヴァプールの設計コンペではゴシック様式の採用が条件とされたが、その当時でさえ建築界では激しい反撥があった。「芸術の自由」の抑圧であり、「建築の進歩」への逆行とされ、様式の自由化が要求された。その三〇年後のギルドフォードのコンペではそうした条件は入らず、しかし結果としては「控え目な伝統主

義者」といわれたモーフのゴシック案が採用された。

スコットの辞任をうけて一九四七年に設立された再建の基本方針策定委員会も「デザインはゴシック・スタイル」という条件でコンペを行うべしとした。しかし、この条件はのちに引つ込められて、一九五〇年にコンペが実施された。なぜ引つ込められたかはあきらかでないが、三人の審査委員（モーフを含むいずれも第一線の建築家）を推薦した王立建築家協会（RIBA）の中心的メンバーの意向が働いたものと推測される。

この時期には協会の主流は現代建築派に移っていた。その背景には、歴史的建造物をもとの様式で再建するのは無意味であるとするウィリアム・モリスのつよい影響力がうかがえる。

当時は宗教界も混迷のさなかにあった。とくに英国国教会は、教会離れと、知識人を中心とするカトリックへの改宗に悩まされた。ここに登場する人物でいえば、かつてのピュージン、T・S・エリオット、そしてスコットその人までがカトリックになる。教義・典礼面での改革と、建築的にもそれを実践しやすい場の創造が要求された。コヴェントリの主教もその熱心な唱導者の一人であった。そして二一九の応募作からそうした要求をみたく可能性のもっとも高いスペンスの作品が選ばれた。二、三位もまた現代建築のデザインであった。

二羽の不死鳥

この過程でイギリス建築界は一種の見識を示すことができたといえる。その背後には保存・修復・改造をめぐる長い実践と論争の蓄積があ

り、それをくぐりぬけた彼らは安易な復元策も、大衆的には人気のあるゴシック様式での再建の道もえらばなかった。スペインスの回顧録『コヴェントリの不死鳥 大聖堂の建設』（一九六二）を読むと彼がほとんど四面楚歌のなか、いかにすぐれた建築家たちによって支えられてきたかがわかる。

ということは、しかし、住民の圧倒的支持をうけて完全復元の道を選んだドレスデンをおとしめることでは、まったくくない。あれは論議の余地のない、最善の選択であった。戦前の、あの街のシルエットを知るものにとつてほかのいかなるかたちの建造物の入る余地もなかったにちがいない。それに対して、コヴェントリでは空襲はこのうえなく美しい廃墟を残してくれた。これを生かさめ手はない、とばかりに。

こうして、それぞれの灰燼のなかから「不死鳥」が、一羽は二十二年のちに飛び立ち、もう一羽は実に六十年のちに飛び立とうとしている。

「蛇足」

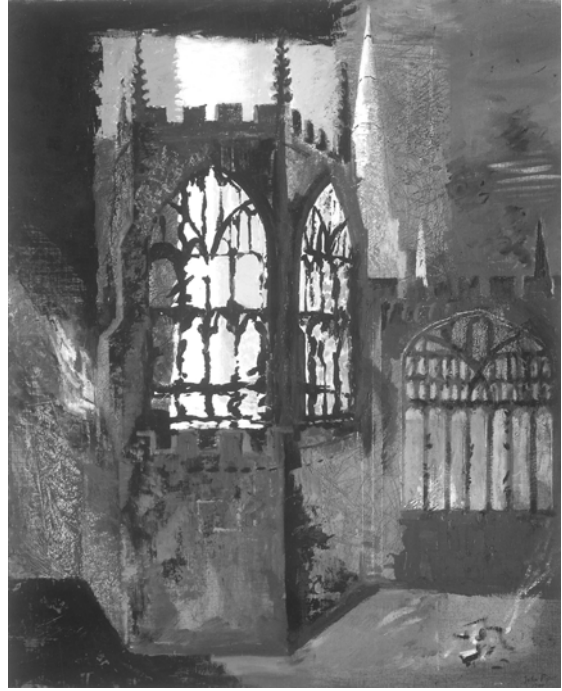
恥を書かねばならないのだが、文中「イギリスのゲルニカ」として紹介したジョン・パイパーの絵（『コヴェントリ大聖堂』一九四〇・二一・二五）を見ておきたいと思つて、この春ロンドンに出かけた。ケネス・クラークの半自伝『後半生のわたし』（*The Other Half: A Self-Portrait*, 1977）の記述と、インターネットで調べたパイパーの

当時の画集『四十年代』（*John Piper: The Forties*, 2000）の発行所が帝国戦争博物館であることから、現物はまずまちがいにそこかテイト・プリテンにあるものと思ひ、直接の問い合わせを怠つたままノコノコ出かけたのである。

結果は、その絵はテイトにはないとわかり、帝国戦争博物館では特別展のためパイパーの絵は見られないと断られた。応対のおばさんがすごいコクニーで態度もいい加減、怪しいと思つたので、せめて絵の所在確認をと、別の学芸員をつかまえるべく粘つたがうまく行かず、当の画集も置いていなかった。ここはすっかりお子様向きのレジヤールランドになつてしまい、マニアに親しまれた昔の面影はない。

しかたがないので、帰国後画集を取り寄せて調べたら、なんとこの絵はマンチェスター市立美術館所蔵とあるではないか。マンチェスターは去年訪ねたばかりで、ちくはくなことよ、と悔しい想いをした。問題の絵は二〇号か二五号ばかりの（76・2 x 63・5）小さい絵で、これが「ゲルニカ」といわれると拍子抜けするが、複製で見ても荒削りのタツチと鮮烈な色彩が、当時の打ちひしがれた人々の心をとらえたのである。

コヴェントリにも久しぶりに足を踏み入れてみた。ここは戦後イギリスの都市再開発計画のなかでもっとも野心的なプランが注目された街で、はじめて訪れた一九六八年にはもうそれが完成していた。大聖堂からしばらく下つたゆるやかな広い



ジョン・パイパー「コヴェントリ大聖堂、1940年11月15日」
(マンチェスター市立美術館蔵)

坂道が歩行者天国になっていて、その両側の二階に歩行者デッキがめぐらされているのが新鮮にみえ、それをつなぐ歩道橋を合わせて二階建ての公園という感じだった。当時は斬新なデザインの商店街で、コヴェントリの市議会が大聖堂の再建に冷淡だったのは、ひとつにはこの計画を最優先させたという事情があった (Junichi Hasegawa, Replanning the Blitzed City Centre, 1992)。いまそのままだが、かつてのインパクトはない。両端にあたらしいショッピングモールができ、直交する通りにもアーケードと、商店街は

アミーバ状に増殖しているのに、それらは今までのスタイルで、あの独特の様式はどこにも引き継がれていないからだ。

商店街といえばおどろいたのはドレステンである。中央駅から市心部へ伸びるブラーガー通りの一帯は東独時代には、例の半ばゴーストタウン化しつつある高層アパート群が散在するだけの味気ない場所だったのが、いまやほんの数年の間に花壇、噴水、並木の広大な遊歩道を中心に左右にホテル、デパート、映画館、劇場、レストランなどのブロックを配した巨大な新都市を一挙に出現させた。壮観であり、ミシュランは新しい街というのに星一つを与えているが、デパートは異様にシンプルで巨大な箱であり、ホテル・ゾーンは「イビス」など同じ色、同じ形の建物を幾棟も並べて無機的なドヤ街をつくりだし、ショッピング・センターは八層ものテラス式庭園つきの、城のような構造物であり、シネマ・コンプレクスは傾いた温室のようである。未来都市にまぎれこんだようで、おもしろいが落ち着かない。私はふとこの高等工芸学校がドイツ表現主義の発祥の地であることを思い出し、なるほど御里は争えないものだと妙に納得した。

本文で書き落とした再建費用の負担の問題とその意味を、最後に記しておく。

コヴェントリ市が大聖堂の再建に一銭も負担しなかったことはすでにみた。国の戦争損害委員会は『単純な建替え』の費用だけを国費で持つとしていて、あとは募金に頼るほかはなかった。ス

ペンスが教会幹部とカナダまで三か月の募金行脚に出向いたのはそのためだし、施工業者は利益を全額寄付した。それでも百万ポンド近くの費用の大半は国が支出したのである。

他方ドレスデンでは、貧しい東独を抱え込んだ九十年代のドイツ政府には聖母教会再建の費用の大半を用意するゆとりなどなかった。一回限りで四千万マルクの拠出を決めたが、これは一九九九年当時の必要見積額一億二千七百万ユーロの一五%というところだろうか。ドレスデン市は一〇%の拠出を決めていて、残りは募金ということになるが、当時すでに八千六百万ユーロ（六七・七%）を集めていた。現在ではほぼ目標を達成したと聞く。

両教会への国際的支援にこれだけの金額的な差があったのは、もちろん四〇年という時をへて世界が豊かな時代になったからであるうし、もしかしたら二つの都市を襲った運命の、ことの次第を知る多くの人びとにとって、ドレスデンへの同情がはるかに大きかったからかもしれない。

しかし、私には両市民の間の復興への意欲に温度差があったようにも思われる。聖母教会の地下聖堂での募金コンサートでも、たまたま私の聴いた曲目構成は初期ベートーベンの室内管楽曲だけという地味なものであったのに、五百席がぎっしり満席であった。CDや教会の石入りの時計といったグッズの販売も、コヴェントリでは見たこともないが、ドレスデンでは聖母教会のすぐ脇にりっぱな店を開いている。コヴェントリにはない日本語の無料パンフレッ

トもここにはある。何よりも一人である私の、ただの好奇心からのインタヴューの申し込みに、ギョットラーさんと建築面の最高責任者であるイエーガーさんが一時間も付き合ってくれた。聞けば日本人の寄付は三人しかいなかったというのに。